



東京の尊徳の足跡・再訪



芝西久保八幡社前にて

これまで報徳博物館友の会の事業であった『友の会だより』の発行と「尊徳遺跡めぐりの会」が、本年から公益財団法人報徳博物館の事業として引継がれることになりました。本号はその第1号(通算108号)です。また、去る6月21日に開催された遺跡めぐりは、第1回(通算25回)として、友の会初回の「東京における尊徳の足あと」とめぐりの再訪としました。参加者36名、梅雨の最中でしたが、さいわい時々小雨程度で予定のコースを廻ることができました。

旧芝離宮恩賜庭園 1677(延宝5)年老中となった大久保家五代目の忠朝は当時九州唐津藩主でした。9年後の貞享3年(1686)に小田原藩主に返り咲き、小田原藩中興の祖と言われています。



芝離宮庭園(旧大久保家上屋敷)

幕府から江戸芝海岸埋立て地に上屋敷を拝領すると、小田原から庭師などを呼び、潮入りの回遊式築山泉水庭園を造営しました。近くの幕府造営の浜離宮と共に名園として著名です。忠朝は下野桜町領4千石(三か村)を三男の教信に分地し、旗本にしましたが、そこが後に尊徳が財政再建に尽力した因縁の地となります。尊徳を取立てた藩主忠真は忠朝から七代目。文政元年(1818)老中に就任し江戸城大手竈ノ口の役宅に移ると、この上屋敷を幕府に返上しました。その代替地もこの庭園の近く、浜松町駅前の高層「世界貿易センタービル」の辺りで、小田原藩士たちはここを「芝上屋敷」と呼んでいました。



貿易センタービル

西久保八幡神社

平安時代の創建とされ、徳川二代將軍秀忠の正室お江の方(姉は淀君)が家康と秀忠の戦勝を祈願した八幡社。その報賽として息子の家光の時代に社殿が造営さ



西久保八幡神社境内

れ、繁栄した江戸八所八幡の一つ。八八幡詣(ややはたもうで)として多くの参詣者を集め、周辺は門前町として賑わいました。

宇津飢之助の屋敷跡 西久保八幡社のはす向かい、地下鉄神谷町駅近くの「CR神谷町ビル」が立っているあたりです。尊徳が救済した桜町の領主、旗本宇津飢之助の江戸の拝領屋敷は1600坪ですが、当主の居宅は現在の桜田通りに面した平地の部分です。その奥は急にせり上がって高台となり、そこに馬場と稽古場がありました。天保13年(1842)に幕臣となった尊徳は、田町の海津伝兵衛の屋敷を借りて日光仕法雛形作成に取組んでいましたが、弘化2年(1845)の江戸大火で類焼したため、宇津邸の稽古場を借りて作業を続けました。



宇津邸跡のCR神谷町ビル



「江戸切絵図」宇津邸(中央)と西久保八幡社(左上)

宇津家の屋敷の裏手は、高台を削って整備した広い「切通」(切絵図・広いオレンジ色の部分)で、増上寺への参道となっており、参詣人目当てに大道芸などの見世物小屋や茶店などが軒を並べ大変な賑わいを見せた広場でした。尊徳が引越した直後の宇津家では、そうした大道芸人などを招いて芸を披露させ、そこに尊徳や息子の弥太郎も招かれました。それが度々に及び、仕事に集中したい尊徳やその弟子たちには迷惑であると共に、財政再建中の宇津家にあるまじきことでもあったので、尊徳は宇津家の用人に注意しま

した。その後は沙汰止みになりましたが、渋面の尊徳の顔が目浮かぶようです。

皇居東御苑 東御苑は、江戸城があった場所です。尊徳は天保13年(1842)10月、幕府に登用されますが、その際、事務手続きなどを行った場所が、下勘定所(しもかんじょうしょ)です。この役所は現在の大手門を入った所の正面にありました。尊徳はこの下勘定所に袴を着て登庁し、お勤めの心得などを一通り聞かされました。

私たち一行は、大手門をくぐり、右手に皇室関



旧江戸城本丸の「松之廊下」碑

係の美術品を所蔵する三の丸尚蔵館を見て奥へ進み、江戸時代警備を担当した同心番所・百人番所・大番所前を通って本丸に入りました。「忠臣蔵」で有名な松の廊下跡石標を過ぎて、広い芝生の広場をぬけて天守台の石垣の上に上がりました。ここから、小田原藩主大久保忠真が拝領した「辰の口」老中屋敷の跡に立つ、東京海上日動ビルの方



旧江戸城天守台石垣

昼食 バス駐車場のある皇居前広場、楠正成像のすぐ前にある楠公レストハウスです。楽しいおしゃべりのなか、おいしいお弁当を頂きました。菊のご紋に似た図柄を刷り込んだお箸もお土産にしました。



根津神社(権現)本殿

根津神社の周辺 根津神社は、五代将軍綱吉が甲府宰相の綱重の子「綱豊」を養嗣子に定めると、綱豊の産土の地である根津に、壮麗な権現造りの本殿や幣殿・拝殿などを建て、氏神の根津神社にその屋敷地を献納しました。

尊徳は、弘化年間(1844~1847)、この根津の地を盛んに訪れています。その主な理由は、門前町の小役人の居宅が集まる一画に、小田又蔵というちょっと知られた漢学者であり蘭学者でもあった旗本が住んでいたからです。御家人として勘定所に勤務し、能力を発揮してスピード出世し、旗本の身分になりましたが、本人の意思で居宅はそのままでした。その又蔵が、報徳仕法に賛同、傾倒し、全くの手弁当



「江戸切絵図」根津権現と門前町

で多くの同志をまとめ、グループを作り、根津の自宅を開放して、仕法事業記録の漢文化や日光仕法雛形の校訂などを推し進め、「報徳学社徒」と自称して報徳の発展に力を尽しています。尊徳は、その取り組みに対し感謝し、支援の手を差し伸べるとともに、時間の許すかぎりその仲間となつて、深夜まで議論の花を咲かせたのでした。尊徳が最も深い信頼を寄せた人物の一人でした。

報徳の広場

◇博物館の入口の松の木を伐採

開館当初より博物館の入口にあって、館前に風情をそえてきた赤松と黒松の2本の松の木が、6月15日・16日の2日間で伐採されました。ともに松食い虫被害で立枯れが進んだためですが、とりわけ、黒松の方は3年前の3月に太い枝が折れるなど、衰えが目立ち、路面を覆っているため、倒木の危険が心配されてきました。

大木の伐採作業は専門業者によって行われました。館の東側に横付けされたクレーン車のアームが高く伸び、その先端からのワイヤーロープで固定された幹や枝を、上から順に職人が切って降ろします。作業の間、博物館前の道路は片側交互通行となつて、交通が規制され、また一般の来館者の安全を考え、この2日間で臨時休館としました。



道行く人の中には、「あれっ、切っちゃったんだ」「よい木だったのに……」といった声もあり、なじみの松が消えて寂しくもありますが、危険は回避され、博物館前の視界は開けて、雰囲気明るくなりました。

その後、館前を通る小学生たちは、新しい2つの切り株を見つけると立ち止まり、腰掛けたり、その上に飛び乗ったりして、行きずりの遊び場として楽しんでいます。

◇斎藤館長代理退職

本年3月31日をもって、斎藤清一郎館長代理が退職されました。小田原・箱根地域の小学校の教員・教頭・校長を勤めた後、1989年(平成元)4月1日、博物館に着任。以来、四半世紀余り、博物館の業務を支え、報徳の研究・普及にも尽力されてきました。本紙『報徳博物館友の会だより』

の執筆と編集も、この10年間はほぼ斎藤館長代理の主導で進められてきました。

1928年(昭和3)生まれ、87才のご高齢ですが、まだすこぶるお元気に見え、活躍が期待されましたが、ご本人の希望により、「勇退」となりました。今後もご多幸をお祈りしたいと思います。

◇報徳関係新刊図書紹介

大藤修(東北大学名誉教授)著『二宮尊徳』

吉川弘文館 四六判 352頁 2400円+税

14年前、『近世の村と生活文化―村落から生まれた知恵と報徳仕法―』(吉川弘文館)を著した大藤修氏による待望の尊徳伝。「はしがき」によれば、尊徳のことを「調べれば調べるほど、自身が人生経験を積まなければ、とうていその深みをとらえきれない、一筋縄ではいかない人物だ」と思い知らされ、躊躇しているうちに、本書の執筆依頼を受けてから30年余も歳月が流れてしまったとのこと。研究対象に取り組む著者の謙虚で真摯な姿勢は本書全体からも読み取れます。また、尊徳・報徳に関する他の人々の研究に対しても敬意をもった取り上げ方をしています。

目次は以下のとおり。第1、誕生と時代・生活環境 第2、自家・総本家の没落と再興 第3、小田原城下での武家奉公と服部家仕法 第4、野州桜町への道程 第5、桜町領復興の苦難と成就 第6、思想の体系化と報徳思想の成立 第7、報徳仕法の広まりと幕吏就任 第8、領主階級との確執 第9、老いと死 第10、近代報徳運動と少年「二宮金次郎」形象。

◇お知らせ

報徳博物館は報徳福運社の公益財団法人への移行と「報徳博物館友の会」の活動終了により、これまでの友の会発行の『友の会だより』は『報徳博物館だより』として、「報徳遺跡バス見学会」は、報徳博物館の事業・行事としてそれぞれ引継ぐことになりました。これに伴い今後の発行・開催回数は新規の表示になりますが、従前の実績をふまえて、通算回数を括弧書きで併記してまいります。

発行 公益財団法人報徳福運社

報 徳 博 物 館

〒250-0013 小田原市南町1-5-72

電話0465(23)1151・振替00230-6-49044